九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

透谷の「蓬莱曲」と白楽天の「長恨歌」及び謡曲「皇帝」

楊, 穎
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/24635

出版情報：Comparatio. 15, pp.1-13, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

透谷の「蓬莱曲」と白楽天の「長恨歌」及び謡曲「皇帝」

楊　穎

一　はじめに

透谷の思想的・文学的な発想については、西洋の思想・文学との関連はかなり解明されているが、中国古典文学との関連についてはまだはっきりしていない点が多い。「蓬莱」は中国の伝説に出てくる不老不死の地とされる霊山である。佐藤善也の「蓬莱曲」注釈には陶淵明「帰去来辞」、「史記」、曹植「洛神賦」等との連想が指摘されている（注一）。本論では、「蓬莱曲」と白楽天の「長恨歌」および「琵琶行」との関連、また謡曲「楊貴妃」および「皇帝」との関連について考察したい。

二　透谷の漢学の素養

透谷は明治六年（数え年六歳）から十一年まで、郷里の小田原において、祖父と継祖母のもとで育った。祖父は文化十二年（一八一五年）の生まれで、明治十七年（一八八四年）に歿した小田原藩医であった。士族（注二）に属する。「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）には「生の祖父は凡そ世にめづらしき厳格の人」（注三）ともある。桜井明石「透谷子を追懐す」中の透谷の直話では父親は「官途から退いたのちは従来愛読した漢籍其他書物といふ書物は一括して閣上に積み置いて、新聞紙以外一切読書といふことはしない人」（注四）であったという。つまり幼少期、藩医であった祖父の膝下にあったときも、その後父母と同居していたときも、ある程度漢学を修めたことが、十分想像される。透谷は士族の子弟として漢籍と縁のある育ち方をしたのである（注五）。

透谷の明治二十年の「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）に「其頃生の最も好みたる小説は楠公三代記、漢楚軍談、三国志等にして、日夜是等の小説を手離す事能はざりし程なりし」（注六）とある。中国で誰でも知っている有名な歴史物語である「漢楚軍談」「三国志」は当時の日本人に流布していたが、透谷も愛読したのである。

透谷は明治十五年、泰明小学校を卒業した。後年の「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）に「同十五年は生をして殆ど困死せしむべき程の一年なり、其第二着は、生が新に入学したる岡千仞の私塾は実に生をして不愉快に堪へざらしめたり」（注七）とある。その後、山梨県南巨摩郡睦合村南部にあった近藤喜則経営の基督教主義を加味した英・漢・数の私塾蒙軒学社に入った。翌明治十六年九月、透谷は東京専門学校（早稲田大学の前身）の政治科に入り、この頃、「（和漢文学）の文章規範、八家文、史記」「（作文）の和漢作文」などを多少履修したと柳田泉の「透谷傳の一節」にある（注八）。授業にあまり出なかったが、図書室で政治学、社会学、歴史の英書、和漢書を読み漁ったらしい。「生は常に学問の仕方は自ら脩め自ら窮むる禅宗臭い説を持ち居けり、左れば、学校に在りても教科書をしらべんよりは数多の書史に渉獵するこそ面白しと、日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居けり」（注九）とある。この時期の透谷の読書範囲は、それまでの「楠公三代記、漢楚軍談、三国志等」の英雄小説

のレベルの枠を越え出て、伝習録、韓非子、荘子などの中国の思想家の本にまでも及んだ。

また、明治十五年秋から明治十六年春にかけて大矢正夫を知り、のち竜子秋山国太郎をも知った。大矢正夫と秋山国太郎は民権家の中で透谷がもっとも親交を結び、生涯忘れ難い記憶を抱くにいたった二人の人間である。後年の「三日幻境」には「はじめてこの幻鏡に入りし時、蒼海は一田家に寄寓せり、再び往きし時に、彼は一畸人の家に寓せり、我を駐めて共に居らしめ、我を酔はしむるに濁酒あり……我をして我疎狂を知るは獨り彼のみ、との歎を発せしめぬ。おもむろに庭樹を瞰めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人、剣を撫し時事を慨ふるものは蒼海、天を仰ぎ流星を数ふるものは我れ、この三箇一室に同臥同起して、玉兎幾度か罅け、幾度か満ちし」（注十）という記述がある。色川大吉の研究によると、透谷が川口村に最初に入ったのは明治十七年七月二十四日で、大矢正夫が秋山（梅太郎か）家に寄寓していた。二度目に入ったのは明治十七年十一月で、大矢正夫が隣家の秋山国太郎家に寄寓していた。三度目に行ったのは明治十八年十月で、大矢正夫に別れを告げにいった時のことであろうと指摘されている（注十一）。特に二回目（明治十七年十一月十五日）は「透谷が公歴らの読書会に姿をあらわす。この後か、透谷、上川口村に大矢を訪ね、秋山国太郎宅で翌年春ごろまで起居を共にする」（注十二）。「透谷の一番心を開いて行って居ました友人は大矢正夫さんという方でした」（注十三）と美那子の回想にある通り、当時の透谷は大矢正夫と一番親しかった。そうすると、何ヶ月にもわたって大矢正夫と一緒に居た時に、おそらく色々な話をし、漢文学にも話題が及んだにちがいない。後年の透谷の妻・ミナの回想にも「其の頃（大矢正夫と交友していた頃――筆者注）は漢詩を作つた何んでも大矢さんの話に依ると一ヶ月に三千首も作る。而も奇妙な詩句を並べてあるので大矢さんには判らなかつた「おい北村之れは何だ、ちつとも判らないぢやないかと云はれると「もう少し勉強するさ」と済したものです」（注十四）とある。

大矢正夫の漢学の知識は、ほとんど「恩師にして救命の主」だとされる相摸原の開拓の祖の長男孝之助から授けられた。彼は「毎夕正夫の為に漢籍を講授し、詩文を訓解するを以て、唯一の楽と為す」（注十五）と大矢の自筆した「大矢正夫自徐傳」に回想されている。後年、獄中で数百首の漢詩を制作している（注十六）。

数え年十六歳の自分の肖像写真の箱の蓋に透谷の最初の漢詩文二首が記されている。

世途困難復奚疑　志存濟時望不羈　三寸筐裡蓄眞影　何論青史姓名垂

自笑身世一蜉蝣　生死窮榮何必憂　區々丹心堅鐵石　一鞭又足振神州（注十七）

壮士風の慷慨、政治的理想に托した夢を見せる作品である。二つ目の漢詩の起句は「間接には『荘子』に、直接には蘇軾の「前赤壁賦」の「寄蜉蝣於天地　渺蒼海一粟」にもとづいた発想であろう」（注十八）と関良一が指摘している。

また、明治十八年の紀行文「富士山遊びの記憶」の中に五言と七

言を交互に組み合わせた変体的な漢詩が三首ある。特に、二番目の漢詩の、蓬莱山に登って夢に女神に会い、そこで神が奇薬を整えるというくだりは「東洋的な神仙思想のあらわれている、幻想的な作品である。（中略）女神とともに曇間より下界を見るという構案は白居易の「長恨歌」を連想させる」（注十九）との指摘がある。

透谷の作品には中国古典の人物名も多く引用されている。白楽天、陶淵明、高青邱のような詩人や、岳飛、張巡、項羽、漢王などの軍事家、また孔子、孟子、韓非子、老子、王陽明などの思想家の名前も見える。透谷の漢学の素養を裏付ける一面である。

三、「蓬莱曲」と白楽天の「長恨歌」および「琵琶行」

「長恨歌」は唐の玄宗皇帝の、愛人楊貴妃にたいする長恨、即ちいついつまでも尽きない恋の恨みを歌った詩である。全百二十句、八百四十字から成る長編であり、叙事詩の体裁で歌われ、死後の世界にまでくりひろげられるロマンチックな作品である。制作時は憲宗皇帝の元和元年（八〇六）、時に詩人は三十五歳、長安の西郊・厘県の地方事務官であった。その後、元和十年（八一五）白楽天は宰相にさからったため、江州司馬に左遷された。その翌年の秋、友人の船出を湓浦口に見送った時、月白く風清き夕べ、舟中で琵琶を奏でる者がいる。その音色は高く澄んで、都長安ぶりの調べである。その人のおいたちを聞いてみると、もとは長安の名だたる歌姫で、その昔、琵琶を穆・曹という二人の師匠に学んだが、年とともに、色香も衰えたので、商人の妻として身請けされたとのことである。そこで再び酒を注文して宴を開き、快く数曲を弾かせてみた。弾き終わってから、衰えた様子で、若い時代のおもしろかったことなどを語り、それに引き換え、今は落ちぶれて田舎をさすらっている身の上であるという。そこで長句の歌を作り、これを琵琶引きの女に贈ったというしだいで、全六百十六語から成り、題名を「琵琶行」という。

一方、透谷の「蓬莱曲」は舞台が蓬莱山で、「序」、三齣八場と「別篇」（慈航湖）で構成されている。

「蓬莱曲」を完成する前、明治二十三年十月二十二日の日記に、透谷は以下のように述べている。「「楊貴妃」、われ支那歴史的エピソク又はドラマを作りて白楽天を泣かしむべし」（注二十）。佐藤善也によると、「「長恨歌」全文の書写も現存し、関心が深かった」（注二十一）。

「蓬莱曲」が「長恨歌」と「琵琶行」から着想されたと思わせる主な部分は柳田素雄と仙姫にかかわるくだりである。仙姫は柳田素雄の亡くなった恋人の分身として登場する。特に第二齣第一場では、蓬莱山頂を仰いだ柳田素雄が琵琶をかき鳴らしながら歌っている。やがて、空中からそれに和した仙姫の声がきこえ、仙姫が二頭の鹿を連れて現れ、素雄の前を通り過ぎようとする。彼はそれを死んだ恋人の露姫だと思い誤り、琵琶を捨てて彼女の方へ駆け寄り、再会をよろこんで話しかけると、声まで露姫にそっくりなので、彼は狂喜する。やがて、仙童雪丸が姫を探しに来る。彼女が仙童をつれて消えてゆく。彼は恋人露姫の幻に欺かされたのだった。第二場で、蓬莱山の道士（鶴翁）との会話が描かれているのは、「琵琶」の作用によって現実認識がよみがえっているからである。

佐藤善也の注釈に「仙姫は仙女。山を守る女神だが、かつて現実世界に存在し、今は仙女になった露姫は白楽天の「長恨歌」における楊貴妃に相当する」（注二十二）とあり、また桶谷秀昭も「蓬莱山という場面設定には古くからの伝統的なイメイジがつきまとっている。海上の霊山、不老不死の仙界であって、透谷がこの劇詩を作るのに参照に、その部分的イメイジを借用した白楽天『長恨歌』や謡曲『楊貴妃』にも、それはあきらかである」（注二十三）と指摘している。

「蓬莱曲」と「長恨歌」および「琵琶行」が関係する箇所をまとめてみると、以下のようになる。（前句は「蓬莱曲」からの引用とし、後句は「長恨歌」「琵琶行」からの引用とする。「長恨歌」を「長」にし、「琵琶行」を「琵」と略記する。傍線は引用者による。）

① 「ひとり寐の、眠りの成らぬ暗の夜に、覚めながら切歯る苦悩」（注二十四）

「長」「夕殿螢飛思悄然　孤燈挑盡未成眠」（注二十五）（夜の御殿にとびこう螢を見ては、しょんぼり心細い物思い。わびしい一つの灯明をかきたてかきたて、かきたてつくしても、なお寝付かれない。）

② 「起き出でゝこの琵琶を取り上げ、切々と揚げて弾けば、陰るゝ悲湧上り　嘈々と抑へてひけば重ね積る憂は消ゆ」（注二十六）

「琵」「大絃嘈嘈如急雨　小絃切切如私語　嘈嘈切切錯雑弾　大珠小珠落玉盤」（大絃は嘈嘈とせわしく、まるで夕立のようだし、小絃は切切と細くつまって、耳元でささやくことばのようである。嘈嘈の声と切切の声とが入り混じって弾かれると、大きな、また小さな真珠の粒がカラカラ、サラサラと硬玉のさらの上に落ちるかのようだ。）

③ 「この琵琶よ！この琵琶よ！夜鴉苦しく枯枝に叫ぶ夜半も、鳴血鳥窓を掠めて飛ぶ行く時も」（注二十七）

「琵」「其間旦暮聞何物　杜鵑啼血猿哀鳴」（ここの明け暮れに聞こえるものはといえば、血を吐いて泣く杜鵑と、かなしげに泣く猿の声ばかり。）

④ 「この人の調べやらん、先に聞し琵琶の天高く鳴り渡りて、彼所の家のわが住を迷ひ出でゝこの原に君に逢ふかな」（注二十八）

「琵」「轉軸撥絃三兩聲　未成曲調先有情」（やがて女は音じめをして、バチで絃をはらってたてた二声三声。それはまだメロディになりきっていないさきから、はや感情がこもっている。）

⑤ 「否、否、否、汝は破らじ　わが腸の破るゝに任せなん」（注二十九）

「長」「行宮見月傷心色　夜雨聞鈴断腸聲」（行宮でみる月の色に、みかどの心は感傷的となり、夜雨の中に聞こえてくる鈴の音は帝の耳に腸を断ち切るように鳴る。）

⑥ 「浮世の旅の修行の間を、しばしは離れ乖くともいつかは元の比翼の空、高砂の尾上の松を下に見て　連れ飛ぶべしと思ひきに、げにつれなき別れなりし」（注三十）

「長」「在天願作比翼鳥　在地願為連理枝」（天上にあっては、翼のくっつきあった鳥、地上にあっては、幹は二本でも枝のくっついた木になろうね、と。）

⑦ 「堅く結べる其の花の口元には、時代をし　知らぬ春含み、其唇頭にはしのゝめ、丹き雲を迷はせり、黄金のかたきもいかでかは、其の暖かき吐気に會ふて解けざらん。緩くは握れど、き

みが掌中には、盡ぬ終らぬ平和と至善、かたくは閉づれどきみが眼中には、不老不死の詩歌と権威をあつむるとぞ見ゆる」（注三十一）

「長」「中有一人字玉真　雪膚花貌参差是　金闕西廂叩玉局　轉教小玉報雙成　聞道漢家天子使　九華帳裏夢魂驚　攬衣推枕起徘徊　珠箔銀屏邐迤開　雲鬢半垂新睡覚　花冠不整下堂來　風吹仙袂飄颻擧　猶似霓裳羽衣舞　玉容寂寞涙闌干　梨花一枝春帶雨　含情凝睇謝君王　一別音容兩渺茫　昭陽殿裏恩愛絶　蓬莱宮中日月長　迴頭下望人寰處　不見長安見塵霧　唯將舊物表深情　鈿合金釵寄將去　釵留一股合一扇　釵擘黄金合分鈿　但教心似金鈿堅　天上人間会相見」（とくに耳よりなのはそれらの中に太真と呼ばれる仙女がいるとのよし。肌は雪のように白く、顔は花のように美しいといえば、これこそ、捜し求める人らしいが果たしてそうであろうか。さてはと、仙山を訪れた修験者は金の宮居の西の廂の、玉で作った門を叩き、でてきた小玉という女の子を煩わして、腰元の双成に取り次がした。漢の国の天子の使者が来たと知らされた姫は花模様の豪華なカーテンの中で、夢覚めてハッと胸を騒がした。手に上衣をとり、枕を押しのけて起き上がると、部屋の中を行ったり来たり。やがて、いくつも続く部屋の真珠のすだれ、銀の屏風が次々に開かれつつ、曇りなす鬢の毛を半ばたらし、今さっき眠りから覚めたばかりの姫が花の冠もきちんとかむらず、取り乱したかっこうで、奥座敷から出てきた。仙女の袂は吹く風にひらひらと翻り、在りし日の霓裳羽衣の舞い姿そっくり。しかし、その美しい顔は寂しそうであり、しとどに涙を流すさまは春雨に濡れそぼつ一枝の梨の花のよう。情をこめ、瞳をこらしつつ、陛下にお礼を申し上げて言った。陛下にお別れ致しましてから、お声もお姿もどちらもはるかなものとなりました。昭陽の局で受けました御愛情は断ち切られ、ここ蓬莱宮の中に、長い長い月日が移ろいました。頭を振り向けて、下の方人間世界を望みましても、懐かしい長安は見えず、見えますのは一面にたちこめる塵と霞。外には何もございません。思い出の品を差し上げて私の心の切なきをお見せしようございますと、螺鈿の小箱と金のかんざしを使者に言付けた。その金のかんざしは二つにさき、螺鈿の小箱はふたとみにはなして、かんざしの一つと小箱の片方を自分の手元に留めた。そしてまた言った、このかんざしの金のように、螺鈿の貝のように、二人の心が堅固でありさえすれば、天上と人間、二つの世界に分かれていても、きっとまた会う日がありましょうと。）（注三十二）

「蓬莱曲」の、特に柳田素雄と仙姫（露姫）との愛のくだりの部分に、白楽天の「長恨歌」と「琵琶行」から引用した語句が時々見られる。語句の引用だけでなく、現実世界に愛する女性が死後、仙女になったというストーリーが白楽天の「長恨歌」からヒントを得たものだと佐藤善也が指摘している（注三十三）。作品のストーリーが透谷の当初の発想にあったものかどうか、その成立過程について、「透谷子漫録摘集」（注三十四）によってたどってみたい。

同　廿七日（明治二十三年八月二十七日――筆者注。以下、同様）東京に帰る。「天香君」の中に、露姫を擁して出る時、かしの実を取りて仙人のくらしをする様、面白かるべし。

同　三十日（明治二十三年八月三十日）

「天香君」世に出でゝ演劇詩の可否決すべし、然る後われこれをわが舞台とせん。

其終わりは、天地ひとりでに静平にして、こゝに天、露ふたり立ちて祝する言葉にて終わるべし。

其表紙に「星」を散すべし、其下には琴もよからん。

二十七日の案に、「露姫」という名前が初めて「天香君」に出てくる。「三十日の案によれば、天地震動という場面もあったらしく、（中略）最終場面は神仙界で、仙女との交渉をもつこと等「蓬莱曲」の構想と極めて類似しており、（中略）「天香君」と「蓬莱曲」とが極めて密接な関係をもつてゐることを推定させる」（注三十五）と笹淵友一が指摘しているが、透谷の三十日の案の結末は「蓬莱曲」の結末とは違い、ハッピーエンドになっている。

同　九日（明治二十三年九月九日）

「初恋心」忘るなよ、一篇の詩となすことを。「新蓬莱」なるもの書き始めたり。（中略）

業平朝臣の曾てありし如し、大神宮にて某女と或男の愛せしことを昔になりて作りなば興あらん。

「新蓬莱」は恐らく「蓬莱曲」を意味するものであろう。「新蓬莱」は業平の「伊勢物語」中の大神宮における男女の恋愛（注三十六）のようなものを頭に描いたようだ。

同　十五日（明治二十三年十月十五日）

「蓬莱曲」は余が最初の作として出づべし。彼の山姫が前に出でゝ、自らの世にありての面白さを談り、姫は其勇気をほむれど、なほ彼をもて人間となし、其恋心を悟らず、人間をそしるべし。

「蓬莱曲」の結末の執筆に取り掛かっていることが分かる。姫の目の前の彼は「人間となし」という一句を見ると、山姫は九月九日の案の中では現実の女性であったが、十月十五日の案では、神仙界のものになったと考えられる。

同　二十日（明治二十三年十月二十日）

恋しらず姫は到底「蓬莱曲」に写しがたければ（短期もの故）、更に「恋しらず」なる散文を書くべし。則ち田舎の景にして、一公子がさまよひ行きて恋するさまをゑがくべし。いろ〳〵恋わびつることをも。

「恋しらず」姫については「蓬莱曲」に書きこむのが難しくても、捨てられたくなかった気持ちが読み取れる。「散文を書」こうと透谷は考えたが、「蓬莱曲」には意外に、素雄が仙姫、つまり「恋しらず」姫を嘗ての愛人露姫と見る描写が残された。二十日以後、おそらく何かヒントを得たかと考えられる。十月二十二日の日記（「楊貴妃」、われ支那歴史的エピック又はドラマを作りて白楽天を泣かしむべし」）によると、白楽天の「長恨歌」の中のストーリー（注三十七）からヒントを得たと推測できる。つまり、素雄の愛人露姫が死んだ

後、仙姫になるというストーリーは玄宗皇帝と楊貴妃の恋愛ストーリーから影響を受けたと思われる。しかし、愛人が仙女になった後、過去のことを忘れ、元の彼さえも知らないという部分には明治二十三年十月二十日の案(「恋しらず」姫)を入れたらしい工夫が見える。仙姫が前世の恋愛を憶えていないという点で白楽天の「長恨歌」の恋愛よりも悲惨であると言える(注三十八)。

四、「蓬莱曲」と謡曲「楊貴妃」、「皇帝」

以上、先行研究を踏まえて、「蓬莱曲」と白楽天「長恨歌」、「琵琶行」との類似箇所を整理し、現実世界において愛していた女性が死後、仙女になったというストーリーの成立過程について考察した。

一方、「透谷子漫録摘集」二十三年の八月十四日の条に「うたひ稽古始めたり」(注三十九)とある。この時期から透谷は謡曲に関心を持ち始めていたようだ。明治二十五年三月十二日の日記に「余は芝神明町一番地なる高田与五郎といふ人を訪ふ、同氏は元と吾父など同僚の官人なりしが、去歳よりひまに成りたるなり、能楽の事に堪能なりとの事なれば、山内氏の紹介を経て訪ねたり」(注四十)ともある。松田存はそれについて「父(快蔵)の同僚高田与五郎から能楽に対する知識を得たらしい」(注四十一)と推測している。さらに透谷は、「徳川氏時代の平民的思想」(注四十二)で能楽の所見を通じて武士と平民との趣味の違いを説明している。「他界に対する観念」(注四十三)にも「複式夢幻能について含蓄のある所見をのべている。そして(中略)彼独自の文学史観を開陳」していると松田存が指摘している。

「蓬莱曲」と謡曲との関連は従来しばしば触れられている。『蓬莱曲』の成立の過程を辿って明らかになることは、『蓬莱曲』に本来神仙譚としての色彩が極めて濃厚であったこと、そしてその構成は劇中夢をもつ一段劇能に倣ってゐたと考へられることである」(注四十四)と笹淵友一が述べており、関良一も「蓬莱曲」に関係したものとして謡曲の「長恨歌」「琵琶行」をあげ、「全体の構想がいわゆる複式夢幻能式で、(中略)また個々の謡曲についていえば、『竹生島』だけでなく、脇能の『高砂』『富士山』『江島』などにも似ており、もちろん『羽衣』にも似ている」(注四十五)と指摘している。また、橋詰静子は複式夢幻能やオルペウス神話との関連において、「蓬莱曲」とその別篇を論じ、複式夢幻能として『求塚』や『谷行』の例をあげて、「透谷の血脈のなかには能のこの霊を呼び出し蘇らせ、彼岸に鬼神の力を借りてほしいままに往き来する日本芸術の形式が生きて働いていたはずであり、またかれは後シテとして正体を現した霊が、意外なほど短くしかし自由に舞うというこの能の形式をごく自然に諾っていたということが考えられる」(注四十六)と述べている。さらに、桶谷秀昭の「蓬莱曲」論も、「蓬莱山という場面設定には古くからの伝統的なイメイジがつきまとっている。海上の霊山、不老不死の仙界であって、透谷がこの劇詩を作るのに参照し、その部分的イメイジを借用した白楽天『長恨歌』や謡曲『楊貴妃』にも、それはあきらかである。」(注四十七)と論じている。以下において「蓬莱曲」と謡曲、特に白楽天の「長恨歌」と素材にした「皇帝」を中心として検討したい。

日本の古典芸能である能には、中国題材の曲が多く見られる。楊

貴妃の物語に関するものとしては「楊貴妃」と「皇帝」の二曲がある。

能「楊貴妃」は中国を舞台にした蔓物で、『能楽源流考』の「室町時代演能曲目資料集成」で見ると、二三回の上演が知られている（注四十八）。一場ものの現在能であり、梗概は方士（ワキ）が玄宗皇帝の命により、楊貴妃の魂魄を訪ねるために、蓬莱宮に行き、美しく寂しげな楊貴妃（シテ）に対面する。そして方士の求めに応じて楊貴妃が形見の釵を与え、楊貴妃に会った証拠として玄宗との誓いの言葉を方士に教える。また方士の求めに応じて華麗な霓裳羽衣舞を舞うが、やがて方士は帰り、楊貴妃は涙に沈む。白楽天の「長恨歌」には方士が蓬莱宮を訪ねる段がある。「楊貴妃」の内容はそれとだいたい一致している。また、詞章の中には「長恨歌」の詩句もしばしば引用されている。白楽天の「長恨歌」を愛好する透谷（佐藤善也によれば、全文の書写も現存するらしい）が謡曲「楊貴妃」に注目しないはずはないだろう。しかし「楊貴妃」の登場人物は三人に限られている。

一方、「皇帝」のほうは鐘馗伝説（注四十九）を主題にしたものであるが、長恨歌の詩句を巧に織り混ぜて玄宗と楊貴妃の事情をも手際よく纏めた、独創性に富む謡曲である。「わが邦固有の戯曲の躰を破つて擅に新奇を衒はん」（注五十）とする透谷にとっては「楊貴妃」より「皇帝」のほうが手本として適当であったと考えられる。

「皇帝」の主要登場人物を「蓬莱曲」と対応させてみると、

前ジテ　老翁　↓　鶴翁
後ジテ　鐘馗　↓　大魔王（最初の登場時）
子方　楊貴妃　↓　仙姫（露姫）
後ツレ　病鬼　↓　鬼王若干、小鬼若干、
ワキ　玄宗皇帝　↓　柳田素雄
ワキツレ　廷臣　↓　勝山清兵衛

平岡敏夫（注五十一）、関良一（五十二）と松田存（注五十三）は、仙姫と素雄の蓬莱原での場面を謡曲「楊貴妃」と関連づけている。本論では、「楊貴妃」に登場していない老翁（前ジテ）、鐘馗（後ジテ）、病鬼（後ツレ）をそれぞれ「蓬莱曲」の中の鶴翁、大魔王、鬼王若干及び小鬼若干と比較しながら、検討したい。

「皇帝」では、老翁（前ジテ）が玄宗皇帝（ワキ）の前に現れ、鐘馗の幽霊だと名乗り、旧恩に報いるため楊貴妃（子方）の病を平癒させるために、明皇鏡を枕頭に立て置くべきことを直奏して姿を消す。やがて鐘馗の精霊（後ジテ）が登場し病鬼を退治するという場面がある（注五十四）。老翁（前ジテ）と鐘馗の精霊（後ジテ）の関係は「蓬莱曲」の中の鶴翁と大魔王の前後の登場に影響があるかと考えられる。特に、「蓬莱曲」での鶴翁と大魔王が人生に飽きた柳田素雄に道理を言い聞かせる口調は老翁と鐘馗のそれに類似していると思われる。

まず、鶴翁と柳田素雄の対話の場面を見てみると、「満ち足らはぬがちなる」「おのれ」（注五十五）をすてようとする素雄の不満に対して、鶴翁は次のように述べる。

これ、これ若き旅人、その、おのれてふものを御することを難んずるも是非なけれ。
わが道の術とはそこぞそこぞ、
そのおのれてふものは自儘者、そのおのれてふものは法則不案内、そのおのれてふものは向不見、聞けよかし、
わが道術は外ならす、自然に逆はぬを基となすのみ。（注五十六）

蓬莱原で出会った鶴翁は「おのれ」という自儘者、法則不案内、向不見を御するのは「自然に逆はぬを基となすのみ」とし、続けて次のように述べる。

そのおのれてふ自儘者は種々の趣好あるものよ、石塊を拝むも彼なり、酒に沈むも彼なり、佳人に楽しむも彼なり、墨に現ずる山水に酔ふも彼なり、蠹と同に書庫に眠るも彼なり、無邪気のおのれかな、是はわが道術にて済度しつるものどもなればなる。
世にはまたくさ〴〵の苦しみあれば、われは「望」てふものをわが術にて世の人の懐裡に投げ入れ、なやみ恨めるものゝ蒼めし頬に血の色を顕はし、またわが術にて世の、見えずして權勢つよきものゝ繋縛をほどく「自由」てふものを憤り慨けるものゝ手に渡し、嬉しみの弊を高く掌げしむる。斯くして佛とならぬものはなし、（注五十七）

「おのれ」の中からさまざまの自然の傾向を引き出して、各自が「自由」に、「望み」を持って生きて行けばよいという「道術」を柳田素雄に教えるのである。それに対して、第三場に登場する大魔王も「世を憤り、世を笑ひ、世を罵り、世を去り、恋人を捨て、なほ足らずして己れの滅を欲ふ」（注五十八）素雄を満足させるために、現世の通俗的な生の姿を歌う。

おかしやな、おかしやな、
王侯貴族は、珍宝権威を得れば、
勇み喜びて世を此上なき者と思ふ、
商估は黄金の光の輝々を見れば、
苦もなく疚もなく笑ひ興して世を渡る、
農家は秋の穂竝の美くしきを見ば
濁酒三杯の楽しさ忘れずと言へり、
少女は賎の夜業の小唄のかたはらに
　　戀のさゝやき聞くことを
またなき憂晴しと思ふなる、
少年は目元涼しきをとめの肩に
　　倚りつゝ胸の動揺めくを、
天が下に唯一の極楽と思ふなる、（注五十九）

鶴翁と大魔王の登場は場所は違うが、「おのれ」を捨てようとしている素雄に対する彼らの説得口調はほとんど同じだと言える。残念ながら彼らの言い聞かせは結局、現実肯定にほかならないので、精神の自由を求める素雄を満足させない。

「皇帝」では老翁が鐘馗の幽霊だと名乗り、旧恩に報いる理由などを述べた後、姿を消す。やがて雲がただよいあたりが暗くなって風もすさまじく吹くと、不思議や鏡の内に鬼神（後ツレ）の姿がうつったので、玄宗がきりつけると、柱に隠れて消えうせる。そこへ鐘馗の精霊（後ジテ）が現れ、病鬼をずたずたにきりすて、これで楊貴妃の御病気はただちに平癒致しましょう、なおわが君の徳を仰ぎ、守護神となりましょうと、玄宗を拝して消え去る。一方、鐘馗伝説には鐘馗がどのように病鬼を退治するかについてさらに詳しい描写があり、「小鬼が現れ、日ごろ玄宗が大切にしている香嚢を盗んだり、玉笛を吹いて騒いでは玄宗をひどく悩まし、たまらず玄宗が大声で臣下を呼ぶところ、破帽を頂き藍袍を差し、角帯をつけ、靴をはいた巨眼多鬚の大鬼が現れ、玄宗を悩ます小鬼をとらえ、指で目をえぐり食べて殺した」（注六十）とされる。騒いでいる小鬼が現れた後、破帽を頂き藍袍を差し、角帯をつけ、靴をはいた巨眼多鬚の大鬼が現れるという場面は「蓬莱曲」の小鬼たち、鬼王たちが賑やかに話したり騒いだりした後、大魔王が登場する場面を連想させないだろうか。少なくても鐘馗伝説の中の小鬼と大鬼の登場は透谷には何かヒントを与えただろうと考えられるが、透谷がどの文献によったのかは今後の調査に期したい。

五、終わりに

愛人が仙女になった後、過去のことを忘れ、元の彼さえも知らないという「蓬莱曲」のストーリーは白楽天の「長恨歌」の恋愛よりも悲惨である。その点に、伯楽天のストーリーに満足できなかった透谷の工夫が見られる。

白楽天の「長恨歌」を好む透谷が「蓬莱曲」を書く際、「長恨歌」を素材とした謡曲「楊貴妃」と「皇帝」を見逃すことはないのではないか。特に、「皇帝」に登場する前ジテ―老翁、後ジテ―鐘馗、後ツレ―病鬼を『蓬莱曲』の中の鶴翁、大魔王、鬼王若干及び小鬼若干とを比較してみると、鶴翁、大魔王、鬼王若干及び小鬼若干の台詞や設定は、「皇帝」からヒントを得たのではないかと考えられる。

「注」

一、『日本近代文学大系　九』角川書店　昭和四十七年八月　六十八頁、八十一頁、九十二頁

二、明治二年の版籍奉還に際し、大名諸侯・公卿を華族、藩士・宮侍・公卿侍・寺侍・神官・旧幕臣を士族、その他を平民と称した。

三、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　岩波書店　一九五五年九月　一六二頁

四、桜井明石「透谷子を追懐す」（「明治文学研究」昭和九年四、六月）『日本文学研究資料叢書　北村透谷』有精堂　昭和四十七年一月　二九一頁

五、関良一「北村透谷と和漢文学」『明治大正文学研究』二十四巻　一九五八年六月　四十一頁

六、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　岩波書店　一九五五年九月　一六二頁
七、同上　一六六頁
八、「透谷傳の一節」『透谷全集』第一巻附録　岩波書店　一九五〇年七月　六頁
九、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　一六七頁
十、「三日幻鏡」『透谷全集』第一巻　岩波書店　昭和二十五年七月　三八九頁
十一、色川大吉『北村透谷』東京大学出版会　一九九四年四月　九十頁
十二、同上　八十八頁
十三、北村美那子談「『春』と透谷」『透谷全集』第三巻附録　岩波書店　昭和三十年九月　八頁
十四、北村透谷未亡人談「国府津時代と公園生活」（「新天地」明治四十一年十月）『日本文学研究資料叢書』有精堂　昭和四十七年一月　二八二頁
十五、『大矢正夫自徐傳』色川大吉編　大和書房　一九七九年三月　二十一頁
十六、同上　四十八頁
十七、『透谷全集』第三巻　一二五頁
十八、関良一「北村透谷と和漢文学」『明治大正文学研究』二十四巻　一九五八年六月　四十三頁
十九、同上　四十五頁
二十、「透谷子漫録摘集」『透谷全集』第三巻　二四九頁
二十一、『日本近代文学大系　九』七十頁
二十二、同上
二十三、桶谷秀昭『北村透谷―近代日本詩人選1』筑摩書房　一九八一年十一月　一一二頁
二十四、『日本近代文学大系　九』九十四頁
二十五、「長恨歌」と「琵琶行」の引用はすべて『中国詩人選集』第十三巻（岩波書店　一九五八年七月）による。
二十六、『日本近代文学大系　九』九十四頁
二十七、同上
二十八、同上　九十八頁
二十九、同上　一〇三頁
三十、同上　一二一頁
三十一、同上　一三〇頁
三十二、この一節について、関良一は「連想させるものがある」と指摘している。（「北村透谷と和漢文学」『明治大正文学研究』二十四巻　一九五八年六月　四十九頁）
三十三、『日本近代文学大系　九』七十頁
三十四、「透谷子漫録摘集」『透谷全集』第三巻　二四五―二四九頁
三十五、笹淵友一『「文學界」とその時代』明治書院　昭和三十四年一月　三三二頁
三十六、『伊勢物語』に「狩の使」という話がある。昔、男がいた。その男は伊勢の国に、狩の使いとして行った。その伊勢の斎宮だった人の親が、「いつもの勅使よりは、この人に丁重におもてなし

しなさい」と言ってあったので、女は親の言いつけだったので、とても手厚くもてなしたのだった。二日目の夜、男は、心が惑乱して「今夜どうしても逢いたい」と言う。女も勿論、決して逢いたくないとは思ってはいなかった。しかし、人目が多いので逢うこともままならない。この男は使者の中でも中心メンバーだったので、そんなに遠い場所に泊める事ができない。女の寝所の近くにあったので、女は人が寝静まるを待って、午後十一時頃に男のもとに来たのだった。男は悶々として寝られなかったので、外の方を見ながら横になって寝ていると、月光のおぼろげな中に小さな女の子を先に立てて、人が立っている姿が見えたのだった。男はとても嬉しくて自分の寝所に連れて入り、午前二時頃まで一緒にいたが、女はまだ何も話をしないうちに帰ってしまった。男は狩りに出かけた。野の中には居たけれど心は空っぽで、今夜人が寝静まったら、すぐに逢おうと思っていたが、伊勢の国守で、斎宮寮の長官でもある人が、狩りの使いが来ていると聞いて、その夜は一晩中酒を飲み明かしたので、全く逢うこともできなかった。夜が明ければ尾張の国へ出発する予定になっていたから、男の方も秘かに血の涙を流した。とうとう二人きりでは逢えなかった。「大神宮にて某女と或男の愛せしこと」とはこの物語を指していると考えられる。(『新編日本古典文学全集　十二』小学館　一九九四年十二月　一七四頁)

三十七、玄宗皇帝は死んだ楊貴妃を懐かしくてたまらないが、道士は皇帝の心に感動し、部下の修験者に言いつけて、その魂魄の行方を丁寧に探させた結果、仙山の蓬莱宮に彼女を見つけた。楊貴妃も皇帝のことを恋しく思い、部下の修験者に思い出の品を差し上げて彼女の心の切なきを見せた。最後、思い出の品は半分を皇帝に渡し、半分を自分の手元にとどめた。二人が天上と人間、二つの世界に分かれても、きっと、合う日があると楊貴妃が祈っている。

三十八、山中に住む仙姫という点では、透谷が『処女の純潔を論ず』に詳論している『八犬伝』の伏姫がもっとも似ているという関良一の意見がある(「北村透谷と和漢文学」『明治大正文学研究』二十四巻一九五八年六月　四十九頁)。馬琴は若いときから『水滸伝』『三国演義』など中国の白話小説を好んで読んだ。彼は中国の小説から深い影響を受けたと指摘されている(『中国文学の比較文学的研究』汲古書院　昭和六十一年三月　四五八頁)。したがって、『八犬伝』の中の伏姫(義実の娘。八房とともに富山へ入り、死後は神霊となって八犬士と里見家を守る。)は死後、神霊となる設定は中国古典文学と離れないと思われる。

三十九、『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　二四三頁

四十、『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　二六〇頁

四十一、『近代文学と能楽』朝文社　一九九一年五月　二十六頁

四十二、『白表・女学雑誌』明治二十五年七月

四十三、『国民之友』明治二十五年十月

四十四、笹淵友一『「文學界」とその時代』明治書院　昭和三十四年一月　三三五頁

四十五、関良一「北村透谷と和漢文学」『明治大正文学研究』二十四巻　一九五八年六月　五十一頁

四十六、橋詰静子『透谷詩考』国文社　昭和六十一年十月　一〇五頁

四十七、桶谷秀昭『北村透谷―近代日本詩人選1』筑摩書房　一九八一年十一月　一一二頁

四十八、王冬蘭『能における「中国」』東方書店　二〇〇五年一月　八十九頁

四十九、鐘馗は中国の疫病よけの守り神である。唐の開元年中（七一三―七四一）、玄宗皇帝は瘧を患って悪夢を見た。その悪夢とは――小鬼が現れ、日ごろ玄宗が大切にしている香嚢を盗んだり、玉笛を吹いて騒いでは玄宗をひどく悩ましし、たまらず玄宗が大声で臣下を呼ぶところ、破帽を頂き藍袍を差し、角帯をつけ、靴をはいた巨眼多鬚の大鬼が現れ、玄宗を悩ます小鬼をとらえ、指で目をえぐり食べて殺した。玄宗がその大鬼に問えば、大鬼は終南山の進士鐘馗という者だと名乗って答えた。かつて科挙（官吏任用の試験）に応じて落第し、これを痛憤して自殺したが、このことを知った玄宗が死後鐘馗を手厚く葬り、及第の扱いをしてやったのに感じ、以後鐘馗は天下治世のために悪鬼を退治する誓いを立てたと申し述べて去る―と、夢からさめるや玄宗の病気はすっかり回復していた。（『日本伝奇伝説大事典』角川書店　昭和六十年十月　四五八頁）。中国の古い出典としては、北宋の沈括の『夢渓補筆談』巻三の「雑誌」に同様の物語が見える（袁珂『中国神話伝説大事典』大修館　一九九四年四月　三二二―三二三頁参照）。日本の出典例としては、松浦静山『甲子夜話』三十七巻に同様な物語が掲載されている（『甲子夜話』続編三　平凡社　一九八〇年一月　一七八―一八二頁）。ただし、謡曲「皇帝」には登場しない大鬼と小鬼が『甲子夜話』中の物語には登場している。謡曲「鐘馗」では悪鬼、鬼王という表現が使われている。

五十、『日本近代文学大系　九』六十八頁

五十一、「死んだ露姫は仙姫となって蓬莱原から素雄を呼んでいた」部分については、「謡曲「楊貴妃」で、玄皇帝に仕える力士が楊貴妃の魂魄のありかをたずねて蓬莱の国に至るところ、あるいはすでに指摘されている白楽天「長恨歌」の一節を想起することもできるだろう。」（『蓬莱曲』の問題―ある読みのこころみ」『日本文学』第三十二巻第十一号　一九八三年十一月　九頁）

五十二、「素雄がワキ僧、仙姫が前ジテ、露姫が後ジテのようにも受けとられるし、物狂物のようなところもある」と指摘している。「北村透谷と和漢文学」『明治大正文学研究』二十四巻一九五八年

五十三、「楊貴妃の魂魄を求めて蓬莱の仙宮に赴く謡曲「楊貴妃」の方士（ワキ）を思わせるし、仙姫は露姫の霊の化身ともとれよう」と指摘している。（『近代文学と能楽』三十七頁）

五十四、『新潮日本古典集成　謡曲集中』新潮社　昭和六十一三月　七十二頁

五十五、『日本近代文学大系　九』一〇六頁

五十六、同上　一〇六頁

五十七、同上　一〇七頁

五十八、同上　一四五頁

五十九、同上

六十、『日本伝奇伝説大事典』角川書店　昭和六十年十月　四五八頁